

# 深イ～話！

No.14

——みんなに読んでほしい本当の話「親子のキャンプファイヤー」より——

K子さんが告げる。

「旅立つ前にお墓参りをしておきたくて、子どもたちを連れてやってきました。今度いつお参りできるか分かりませんが、よろしく願いいたします」

K子さんの夫、Mさんが、三十年間勤めていた会社から解雇通告を受け、失意の中で自らの生命を絶ったのは二年前。小学校二年生のY子ちゃん、六年生のO君、そして高校一年生のE夫君をかかえながら生活苦の日々が続いたが、とうとう家売って故郷の両親のもとへ転居するという。

境内でサッカーボールを蹴っている子どもたちを見ながらK子さんが語る。

「コンビニのパートに出たものの、この子たちの学費や、生活費などの工面に困り果てていました。そんなある日、電力会社から電気を止めるとの通知が来たのです。電気が消えたら子どもたち、びっくりするだろうなあと思うと夜も眠れません。でもその日が来ました。

夕暮れ、最初に気づいたのは一番下のY子です。

『お母さん、電気がつかないよ？』

返事に困っている私を無視して、O君が言いました。

『その電気、こわれたんじゃない？よし、全部のスイッチ入れてみよう』

どこを押してもつくわけがありません。

『変だよなあ。こりゃたいへんだ！もうすぐ真っ暗になっちゃうよ！お母さん、どうする？』

『そうね、もしだめなら、ロウソク買ってきてあるから、大丈夫よ！』

この日のために、ロウソクを用意しておいたのです。やがて長男のE夫が帰ってきました。E夫にはウソはつけないと覚悟を決めた私でしたが、思いもかけないことをE夫が言ったのです。

『ああ、電気が切れちゃったのか？これはおもしろいことになったぞ！お母さん、今夜は庭でキャンプファイヤーやろうよ！小さな庭だけど、チョロチョロもやせば大丈夫だよ。ね、キャンプファイヤーやろう。お母さん！』

その言葉でY子とO君もはしゃぎ始めました。『やろう、やろう。キャンプファイヤーやろう』

『庭で晩ごはんかあ。うれしいなあ！』

E 夫は、電気が止められたことをわかったのに違いありません。だからとつさにキャンプファイヤーやろうなんて言ったんだと思うと胸に熱いものが込み上げてきて、暗いトイレに飛び込んで泣きました。心の中でE 夫、ありがとうって何度も言いました。

その日、コンビニの店長に無理を言っていたいただいた期限切れのおにぎりとインスタントカレーを小さな焚き火を囲みつつ、おしゃべりをしながら食べました。笑顔で長男が語ります。

『いいか、この夜のこと、よーく覚えておくんだぞ！ 電気がつかなくたってあわてることはないだよ。電気がつかなかったおかげで、キャンプファイヤーができたじゃないか！ そうだろう。楽しいだろう。Y 子、O 君』



二人が答えます。

『うん、すごく楽しい』『今夜のご飯おいしいね！』

長男が続けました。

『お父さんが死んじゃったから、うんと淋しいけど、兄さんはね、お母さんとおまえたちがいるから、これからも頑張れる。知ってるよね。お母さんがすごく大変だってこと。でもね、オレたち兄弟が元気なら、お母さんも元気が出るんだよ！ ね、お母さん、そうだよ。頑張ろうね！』

E 夫の言葉の最後の方は少し涙声になっていました。私、あふれそうになる涙をこらえて言ったんです。

『そうよ！ あなたたちが元気で大きくなってくれば、お母さんは幸せ。お父さんだって見守ってくれている。だから、どんなことがあっても、いつまでも一緒にいようね』

深夜、ロウソクの<sup>ひ</sup>燈をたよりに故郷の両親に手紙を書いていると、長男が声をかけてきました。『お母さん、すごく無理してるよね。オレ、高校やめてもいいよ。いくらでも出直せるんだからさあ。お母さんが病気になったら、それこそ、オレたち家族離ればなれになっちゃう。お母さん、オレ高校やめるよ、ね』

すぐさま告げました。

『ダメッ！ 高校卒業しなさい。どんなことをしても大学に行かせてあげるから！ お金のことは心配しないで……』

住職さん、私は、仏さまのような心を持っている子どもを授かりました。この子たちをしっかりと育てて参ります」

家族が旅立って三か月、うれしい便りが届いた。長男 E 夫君が転居先の高校に編入できたとのこと。K 子さんは両親のあとを引き受けて田畑を耕しているという。

深い縁<sup>えにし</sup>に結ばれているこの家族の明日に幸多からんことを。